

自分の立ち位置を確認し、 立ち止まりながら目を凝らす

瀬山 紀子

人は、いくつもの属性をもち、重なる状況を生きている。それは、誰にとっても当たり前のことだとも言えるが、特にマジョリティの側にいればいるほど、そのことは忘れがちなことだ。自分がどのような属性をもっているかを忘れても生きていけてしまうのが、マジョリティである所以だとも言える。特に自分の属する属性について考えないでいられることは、それ自体が特権だと言える。

一方で、マイノリティに属する属性は、社会の中でのつまずきにつながりやすい。それ故に、マイノリティに属する人は、自分の属性に自覚的にならざるを得ない。属性は、自分と切り離しては考えにくく、時に、自分のつまずきの原因となった属性をもつ自分を責めてしまうようなことも生じる。

少し前に、職員採用試験の受験案内に、「身体検査の結果、心身の故障のため職務の遂行に支障があり、またはこれに堪えないことが明らかとなった場合には採用されません」という文言があるのを読み、受験を諦めた聴覚障害のある女性の話聞いた。ある自治体の保健師の採用枠だった。専門職でも非正規採用が増えている中で、正規での公募があることを知り、資格と、これまでの経験を活かして働けるのではないかと考えた矢先に、この文言で、つまずいてしまったと言う。「健康な人」であれば、読み飛ばしてしまうであろう文言が大きな壁となって立ちちはだかった状況だ。女性が多い専門職の正規採用が広がることは歓迎できるが、障害のある働き手は想定されていなかったという事例だ。

文言は、その後、障害者団体からの申入れなどがあり削除された。ただ、実際に、多様な働き手を想定した職場環境がつけられているかと言えば、まだまだ課題が多い実態がある。

自分が気づかずに見過ごしているときに、誰かが大きなバリアを感じている状況が生じていないか。自分の立ち位置を確認し、立ち止まりながら目を凝らしていくことが大切だ。



PROFILE

せやまのりこ：公立女性関連施設で働いた経験があるほか、地域で暮らす障害のある女性たちの介助者を長年務めている。加えて、公務非正規女性全国ネットワークにかかわり、調査活動等を展開。2022年6月より埼玉大学ダイバーシティ推進センター准教授。共著書に『障害者介助の現場から考える生活と労働』（明石書店、2013）、『官製ワーキングプアの女性たち』（岩波書店、2020）ほか。